

example, the production of metabolic water which may disturb the local c. r. h. sufficiently to make it critical or changing the substrate nutritionally in favour of the establishment of other succeeding fungi. More detailed investigations will be necessary to clarify this complicated situation.

Another interesting problem is the effect of spoilage fungi, or the fungal enzymes on the ingredients of crude drugs. Further investigation will be carried on this problem in future.

The authors wish to express their appreciation to Mr. K. Tsubaki, Nagao Institute, for valuable advices and to Mr. M. Asano, Takashimadō Pharmacy, for supplying the samples.

### Literature cited

- 1) Okazaki, K., et al. 1950-1951. Antibacterial activity of higher plants. 1-7, 19. Journ. Pharm. Soc. Jap. 70-71.
- 2) Mossel, D. A. A., and M. Ingram. 1955. The physiology of the microbial spoilage of food. J. appl. Bact. **18**: 232-268.
- 3) Semeniuk, G. 1954. Storage of cereal grains and their products. Chapter III. Microflora. Amer. Association of Cereal Chemists. St. Paul, Minnesota, U. S. A.

### Errata of part 1 of this series (vol. 32 No. 7. 1957)

page	line	for	read
202	9	KCl and NaCl	NaCl and KCl
204, 205		<i>Torula saccharii</i>	<i>Torula sacchari</i> Corda

### 〇クロミウスノキとは何か? (水島正美) Masami MIZUSHIMA: On the status of *Vaccinium hirtum* var. *atrum* Koidz.

小泉博士はウスノキに比べて花数多く、葉裏中肋に白密毛を布き、果実が黒熟するものとして、クロミウスノキと云うものを 1915 年に記載された。これは羽前東置賜（ヒガシオキクマ）郡和田村で自身採集された標本に基いている。中井博士はこれをアオバウスノキ、即ち関東地方以西の低山地産のスノキ (*Vacc. versicolor* Nak. var. *glabrum* Hara の形) と同一物と見なされ (大日本樹木誌, 改訂版, 1927 年), 原博士はオオバスノキの変種に移され (種子植物集覧, 第1冊, 1949年), 大井博士も同様にオオバスノキの変種と見られたがウスノキもヤナギバスノキも全部同物として扱われた (日本植物誌, 1953 年)。

まず以上がクロミウスノキの扱いの様相となるが、実際に小泉博士の基準標本（初めタイプの指定をされていないが、1枚しかないので自動的にそれが基準標本になる）を検すると、筆者は何れの扱いにも左袒しかねるのである。と云うのは、原博士も以前語られたのではあるが、オオバスノキとウスノキとの中間形を呈しているからである。即ち葉は特に裏面の中肋に沿って殆ど開出した白毛を密生するが、同時に中肋上にも多く生じ、前者は裏日本に於けるウスノキの性質と見られ、後者はオオバスノキの性質と見られる。その上多少細くて前屈気味のある毛の状態は正に兩種の中間である。果実の形状は熟したものでは潰れて確とは判じ難いが、黒紫色で少し白粉を被り、花托はウスノキよりも狭いがオオバスノキよりは広い。ここで注意すべき点は下方の小枝に若い果実1個を着けていることで、これは乾固してこそいるが萼筒に稜角が浮き出ており、萼裂片は広卵状三角形で鋭頭に近い。即ち筒部の形質はウスノキのものであり、裂片に於てはオオバスノキの扁円味とウスノキの尖り気味とを併有するものと判断出来る。

以上記した諸形質を合して、小泉博士が命名された最初の意味でのクロミウスノキ（ウスノキに似るも果実黒熟）と云うものは、オオバスノキと裏日本形のウスノキとの自然雑種であり、広義のヤナギバスノキと同一であると筆者は結論したい。ここに裏日本形ウスノキと称するものは、表日本中部のウスノキに比較して一般に葉に円味が多く（換言すれば巾広く）、毛も多く、少くとも北陸地方、中部、関東、東北地方の裏日本気候帯地域、北海道西南部に分布し、ウスノキの地方形を成すと考えられるものを指す。然しウスノキは全体として多形的であるから明確に区切ることは困難である。尚ヤナギバスノキに関しては稿を改めて論じたい。

上述の諸点を学名に要約すれば次の如くである。

**Vaccinium ×nikkoense** Nakai in Bot. Mag. Tokyo **34**: (325) (1920)—Hara, Enum. Spermatoph. Jap. **1**: 65 (June 1949)—sensu emend. (fortasse *V. Smallii* × *V. Usunoki*)

*V. angustifolium* (non Aiton, nec Benth.) Komatsu in Matsum., Ic. Pl. Koisik. **2**: 13, Pl. 91 (1914).

*V. hirtum* Thunb. var. *atrum* Koidz. in Bot. Mag. Tokyo **29**: 310 (1915).

‘*V. versicolor* (Koidz.) Nakai’: Nakai, Tr. & Shr. Jap. ed. 2, **1**: 251, f. 119 (1927), p.p.

*V. Smallii* A. Gray var. *atrum* (Koidz.) Hara, op. cit. 67 (1949).

‘*V. Smallii* var. *glabrum* Koidz.’: Ohwi, Fl. Jap. 908 (1953), p.p.

(資源科学研究所)